

炭焼きの 与助

【memo】

作:近藤せいけん



炭焼き与助 その二

与助は二人の幼子が、大きな、おにぎりを夢中で食べるのを、静かに、悲しげに、見守っていた。

上の男の子が 「このおにぎり一つ、おかあに、食べさせたい。持って行っていい、かい」と。

「いいよ、お兄ちゃんが、おかあさんに、挨拶しよう。さあ、連れて行って馬を、近くの木の柵に縛り付け。

歩きながら、

「坊。いくつになる。」 「おら、七才、良吉。こちが、四才、きく。」

「おれたち、いつも、腹すかしている。貧乏、なんだー」

「この長屋は、貧乏長屋、て、よばれているんだ。本当はねえ、たぬき長屋、て、名、なんだ。それはねえ、大家さんが、たぬき、そっくりだからさ」

「でも、たぬき大家さんは、いい人、なんだ。うちは、おとうが、死んで、おかあも、病気で、何年も寝たきり、店賃（たなちん）も何年も、払っていない」

「それでも、出て行けなんて、言われたことはないよ。」

「おまえが、大きくなって、働くようになったら、払ってくれば、いいよ、て」

「それに、たまに、食べるものを、持ってきてくれるんだ。お菓子も、だよ」

「長屋の、人たちも、すごく、優しいんだ、朝めし、晩めし、を交代で、持って来てくれるんだ」

「でもねえ、ここんところ、大工の富めさんは怪我をして、仕事にいけず、その隣の漁師の貝さんも、平塚の海が時化（しけ）で荒れ、漁ができないんだ」

「漁師の貝さんは、いつも、漁から帰ると、沢山の魚をくれるんだ。ここんところ、四、五、日、帰って来ないんだ。食べるものがもらえないんだ」

「もう、寒くなったから、近所の農家から、野菜ももらえない。」

「だから、ここ、二、三、日、食べられず、お腹を空かしていたんだ」

「そうか・・・」

「お兄ちゃん、ここだよ、おれんとこの、家だ」

「ただいまー おかあ、お兄ちゃんを連れてきたよ」

与助は、良吉にうながされて、戸をくぐり、土間に入った。

六畳一間の、破れ畳の上に、薄いふとんが、敷かれおり、その布団の上に良吉の、おかあさんが、正座をしていた。

「おかあさん。病気だとのこと、寝ていてください。」

「おかあ、このお兄ちゃんから、おにぎりもらったんだ。白米のおにぎりだよ。おかあ、にも、一つもらったぞ。」

「まあ、見も知らずの方から、ちょうだいするなんて・・・」

「まあ、おかあさん、叱からんでください。わたしのほうで、かつてに、したことですから」

「おかあさん、何の病ですか？」

「わたしは、心の臓を悪くして、数年前から、床についています」

「子供達には、大変な、迷惑をかけ、日々、寝ていることしかできない、不甲斐ない親です」

「子等が心配で、心配で、いつも、天国に行った。あの人に、どうぞ、守って、守ってくださいと、祈っています」

見渡すと、何もなく、部屋は初冬というのに、堀りごたつは、あるものの、火はなく、寒々とした。薄いふとんしか無い、貧乏そのままであった。

「さあ、おかあ、食べてよ、白米のおにぎりだよ。さあ、はやく～」

「いいんだよ。おかあは、お腹は空いていないから。二人で、お食べ」

「おらたちは、食べたから、おかあが、食べてよ」

「そうだね、おかあさん、早く病気を治すためにも、食べたほうがいいよ」

「そうだ～おらーが、おいしいもの、作ってあげよう」

「さあー良吉、手伝え」

「きく。もお手伝いする～」

三人は、通りにとめていた、荷車に行き、積んであった、まき、炭、野菜、さつ

ま芋を運んだ。

「良吉、まきをかまどにくべろ。火をつけろ」

「炭をくべて、火がついたら、堀りごたつに、入れろ。ふとんをかけて、おかあさん、入ってもらいなさい」

与助はさつま芋を、洗い、かまどに湯を沸かし、いもを入れ、ふかし芋を作り、野菜には塩を振り、浅づけを作った。

「さあーふかし芋が出来たぞ。野菜の浅づけも出来た。少し早いけど晩めし、じゃあ」

与助は天蓋孤独（てんがいこどく）の身であったが、今、初めて、家族のぬくもりを感じていた。